

2015 Eye's
新潟いちばん物語

想い | つくる | 伝える

2015 F u u d
2015 春号
—季刊—

日本地図上に「弥彦村」が示されている。

Take Free
ご自由にお持ちください

早春のマジックアワーを迎えた彌彦神社。
残照の空の下、社殿にともされた温かい光と杉木立の陰翳が、
神域の荘厳さを際立たせる。(西蒲原郡弥彦村)

がんばろう ● ニッポン!

村上の旬を伝える青空市場

[村上市の六斎市] 文 / 榎本国男



六斎市の歴史は古く、100年近くが経とうとしている。大正7年(1918)、本町町長の命を受け、一人の職員が中条町の衣料品店に出店を依頼し、翌年の8年4月、三之町通りに一軒の古着屋が開店したのが、村上市場開設の始まりである。以来、毎月2日間だけ開く村上市(むらかみいち)は徐々に売上を伸ばし、間もなく10軒近くにふえ、開設の翌年には100軒ほどにふくれあがる。米・味噌・醤油や薪炭なども販売し、市が賑わいを見せ始めると、月6回の六斎市の姿となって定着し、今日の村上六斎市として発展してきた。

村上の檜舞台は毎年初冬から始まる。舞台の主役は鮭である。市民をはじめ、故郷を離れ異郷に暮らす村上人にとってはどこに住んでいても、鮭の塩引きがなければ正月が来ない。鮭、鮭、鮭の日常が続く。村上の鮭が絶品として迎えられるのは味のよさである。この時期に吹く寒風が塩引きの旨みを高めるのだという。炭火で焼いた塩引きの味、味噌をからめた鮭の味噌漬け。地元でいう「だいかい(のべ)」にも鮭の一切れが必要だ。昔ながらの飯寿司(いいずし)も鮭と腹子(卵)が入ってうま

い。飯寿司は発酵料理で村上の特産だ。歴史を遡れば、日本一の鮭の大漁で潤った村上藩は余剰金を藩下の人材育成資金として役立て、多くの優れた人材を育てた美談がある。

村上市役所の脇の道路を市場(いちば)通りと呼び、いまも2と7のつく日の六斎市の市日には人が集まる。城下町村上市内を車で回ってみると黒堀が目立つ。北限の茶所といわれるだけあって何軒もの茶店舗に出会う。名品堆朱(ついしゆ)の店舗もある。いい堆朱、いいお茶、冬の鮭。夏の海水浴。瀬波温泉はどこも渚づたいにホテルが建ち並ぶ。

これらの客の経済効果で村上市は豊かだ。毎年開催される「町屋の人形さま巡り」では人形4000体が73軒の町屋に展示される。「町屋の屏風巡り」も同じように県内外の観光客を集め賑わう。

この日は晴れで、春を思わせる風が頬をなでる。近くのお城山「臥牛山(がぎゅうざん)」の桜も間近。市場も賑わいを増して行き交う人の歩も軽い。店の皆さんの声もはずんでる。市場はどこの町にとっても大事な宝物。鮭で賑わった三面川も春鱒の遡りが待たれるこの頃である。

ふうど 2015春号 vol.28

企画編集 ふうど編集室

発行人 高橋泰義

取材編集 浅川綾子

写真 佐々木聰

デザイン 渡部佳則

題字 斎藤道司

小林翠

編集後記

「彌彦神社の歴史は、2700年近くになります」。取材当初に聞いたこの言葉に、西暦しか知らないものには別次元の世界を感じた。しかし金子さんや高橋さんの平明な言葉遣いと柔らかい物腰から、彌彦神社が日本史の生きた証拠であり、新潟県の発展を支えた県民の精神的支柱であることを実感をもって納得する。そして一見平穔に流れてきた歴史時間のなかでも、領主の交替による衰退期や国家の思想戦略に翻弄される時期などがあり、その荒波を超えて今に至っていた。その底流に柔軟で革新的な神社の気風があったことを初めて知る。伝統的な世界に、進取の精神に富む開拓者の魂が息づいていた。この勁さとしなやかさによって、これから100年先も1000年先も、県民の歴史と日本人の美学が引き継がれていく。でもそれを支える第一歩はく現代のわたしへであることを、時々でも思い出したい。(渡川)

発行所

ふうど 編集室
まごころ印刷の
株式会社タカヨシ

■本社・工場 / 〒950-0141 新潟県新潟市江南区亀田工業団地1丁目3-21 TEL (025) 381-2000 FAX (025) 381-4800
■東京支社 / 〒110-0005 東京都中央区上野1丁目13-3 MYビル2F TEL (03) 3837-4488 FAX (03) 3837-4884
■仙台営業所 / 〒981-0952 宮城県仙台市青葉区中山5丁目7-32 TEL (022) 303-1225 FAX (022) 303-6830
■名古屋営業所 / 〒465-0093 愛知県名古屋市名東区一社4丁目83 ランドマーク社501号 TEL (052) 753-8080 FAX (052) 753-8081
■オフィシャルサイト / <http://www.takayoshi.co.jp> ■商品サイト / <http://www.tk-print.jp>

「ふうど」はここに置いてあります

【新潟市】<中央区>ANAクラウンプラザホテル新潟、駅前オフィスNII GATA、NSG学びステーション、NST、NPO法人 Made in 越後、上古町商店街、旧小瀬家住宅、県立自然科學館、砂丘館、佐藤商会、佐渡汽船ターミナル、朱鷺メッセ、新潟NPO協会、新潟絵屋、新潟 加島屋本店、新潟県政記念館、新潟県庁広報展示室、新潟県立図書館、新潟国際情報大学 新潟中央キャンパス、新潟市市民活動支援センター、新潟市生涯学習センター、新潟市食育・花育センター、新潟市中央図書館、新潟商工会議所、新潟市歴史博物館、新潟ユニゾンプラザ、ピアBandai、ホテルリタリア軒、りゅーとぴあ新潟市民芸術文化会館
<東区>桑名病院、バティスリーカフェオーレアン <西区>新潟ふるさと村、新潟大学附属図書館 <南区>新潟市農業活性化推進センター <北区>新潟せんべい王国、ピューフ島潟
<江南区>新潟市立亀田図書館、柴雲寺地区公民館、新發田市生涯学習センター、新發田市立図書館、農浦地区公民館
【新潟市】加治川地区公民館、柴雲寺地区公民館、新發田市生涯学習センター、新發田市立図書館、農浦地区公民館
【長岡市】長岡市立中央図書館、【燕市】分水ビジターサービスセンター
【出雲崎町】越後出雲崎天領の里【湯沢町】雪国觀光舍 越後湯沢温泉
【佐渡市】SADO伝統文化と環境福祉の専門学校、ホテル大佐渡
【東京都】
【江東区】表参道・新潟駅ネスバス <中央区>プリッジにいがた

エコプレス
バイインダー

針金・糊・加熱が不要な
製本方法を採用し、
リサイクルや怪我の危険へ
配慮しています。



この印刷物は環境にやさしい
米ぬか油を使用したライスインキで
印刷しています。

さあ、これから 行くぞ。



杉木立に遮られた朝の光をまっすぐに浴びる拝殿・本殿。大火で焼失した社殿にかわり、現在の位置に移転し大正5年(1916)に再建。



想い お彌彦さまのスピリッツ

始まりの神

大きな深い彌彦神社は、すべてにおいて県内の他を圧倒する。平成という時代さえも圧倒し、そこにあり。にもかかわらず掃き清められた境内は、それらを高く誇る様子も、無駄な案内板も一切なく泰然としているところに矜持の強さを感じる。彌彦神社の起源は「古事記・日本書紀」に登場する神武天皇まで遡るという。皇紀で二千六百七十二年前。日本史年表では紀元前の弥生時代。大陸からもたらされた稻作

渡り弥彦山の西麓の米水浦(旧寺泊町野積、現長岡市)に上陸。村人に漁労・製塩・酒造の技術を教え、後に弥彦山の東麓に移り、周辺に稻作の技術を広め越後国の産業の基礎づくりを行った。以後、祭神の遺志を継いだ子孫が六代にわたり越後の産業発展に力を尽くしたことから、越後開発の祖神として信仰を集めた。

奈良時代の万葉集に「おやひこさま」の神威が詠われ、平安時代の延喜式には越後国唯一の名神大社と記

技术が、畿内から北日本に広がつていく頃にあたる。祭神は天香山命。天照大神のひ孫。神武天皇の勅命を受け、はるばる熊野から日本海を

渡り弥彦山の西麓の米水浦(旧寺泊町野積、現長岡市)に上陸。村人に漁労・製塩・酒造の技術を教え、後に弥彦山の東麓に移り、周辺に稻作の技術を広め越後国の産業の基礎づくりを行った。以後、祭神の遺志を継いだ子孫が六代にわたり越後の産業発展に力を尽くしたことから、越後開発の祖神として信仰

を集めた。

奈良時代の万葉集に「おやひこさま」の神威が詠われ、平安時代の延喜式には越後国唯一の名神大社と記

技术が、畿内から北日本に広がつていく頃にあたる。祭神は天香山命。天照大神のひ孫。神武天皇の勅命を受け、はるばる熊野から日本海を

億兆人の気

では彌彦神社のパワーの源は、なんなのか。無知と不敬を承知で神社運営のナンバーワンにあたる権宮司の金子清郎さんに、ぶつけ

てみる。

「この世は、常に生成発展するもの。ご祭神の天香山命は「ただよえる國を修固せよ」という神勅を戴き、越後に遣わされました。対立や貧窮で定まらない國を安定させて繁榮させなさい」というような意味ですが未知の國にきて零から出発し、地域発展の基礎を創ろうとするのですから、高い理想と粘り強

いチャレンジ精神がなければできません。ですから神さまは、もともとパワフルな力を持っていました。

そんな神さまの助力をもとめ、この地に根を下ろした先祖たちが神社に訪れます。それも二千年以上

のものと思えない神々しさに息をのむ。そして日が昇ると山は朝日を映す鏡のように刻々と表情を変えた。

「さあ、これから行くぞ」という気持ちに自然となるんですね。それが神さまの発展パワーです」。その結果「古墳時代、彌彦周辺は文化の中心地で、神社が情報の発信基地でした。さらに、ご祭神のご神徳が県内各地に行き渡り越後の国を発展させ、江戸時代から明治時代まで日本一の人口を誇る、大きな県に成長したのです。わたしたちには、そのチャレンジャーの末裔ですから、まだ可能性はあります」と金子さんは力強い言葉で締めてくれた。

上もの間です。その億兆の祈りと喜びが神域に留まり、いまでもマグマの

ように渦巻いています。それが彌彦山や膨大な樹々などを含む森羅万象の生命の氣と融和し、健全で強い氣となって、心に潜んでいる強い生

命を覚醒させるのです。ここに来る

と懐かしい気持ちになり、安らぎますね。でも安らぐだけでなく、次に『さあ、これから行くぞ』という気持ちに自然となるんですね。それが神

さまの发展パワーです」。その結果

「古墳時代、彌彦周辺は文化の中心地で、神社が情報の発信基地でした。さらに、ご祭神のご神徳が県内各地に行き渡り越後の国を発展させ、江戸時代から明治時代まで日本一の人口を誇る、大きな県に成長したのです。わたしたちには、そのチャレンジャーの末裔ですから、まだ可能性はあります」と金子さんは力強い言葉で締めてくれた。

上もの間です。その億兆の祈りと喜びが神域に留まり、いまでもマグマの

ように渦巻いています。それが彌彦山や膨大な樹々などを含む森羅万象の生命の氣と融和し、健全で強い氣となって、心に潜んでいる強い生

命を覚醒させるのです。ここに来る

と懐かしい気持ちになり、安らぎますね。でも安らぐだけでなく、次に『さあ、これから行くぞ』という気持ちに自然となるんですね。それが神

さまの发展パワーです」。その結果

県民の底チカラ

つくる 千年の事業

突然の逆境

東日本大震災から四年を迎えた三月十一日。県内は冬が舞いもどつたよう西北の風が吹き荒れ、夜半には激しい吹雪になった。明治四十五年（一九一二）の同日同時刻、弥彦村は天保以来の大雪に見舞われた。民家から上がった火の手が、折から烈風にあおられ猛火となって南北に連なる門前町を走りぬけ彌彦神社の大鳥居に達し、ついに本殿、拝殿、舞殿など社殿の大半が猛火に呑み込まれた。樹齢を重ねた大櫻や龍蛇のような老松も、その身を折った。火災翌日の境内に立った新潟新聞の記者は「壯麗を極めた越後一宮の社殿。今は礎石を僅かに焦げ残り、その上に焼け細った宮柱が縦となり横となつて折り重なる有様は形容しがたい」と報じている。ご神体は当時の高松四郎宮司により、非常太鼓が鳴り響くなか暗闇をついて無事に遷座され、数々の宝物も

その三倍を超える額が集まつた。それは県民の篤い信仰心の表れであり、同時に日本一の人口を抱えた県の富力を象徴する出来事だった。

再建事業に奔走した高松宮司に近い立場にある金子権宮司に、当時の宮司の心境を尋ねる。「新潟県民の心の支えであった宝物を焼失した訳ですから、責任者としては腹を切つてお詫びしたいというくらいの気持ちだったと思います。ですが炎上よりさらに壮麗な神社を創り県民にお返しするのが努めと肚を決めたんですね。万物、常に成長し発展という言葉どおり、考え方が建設的です。そして困難と思えた募金活動も、千年の事業をやるんだ」という志が確かなものだったので、実際に募金業務を遂行する神職、県内外の財界人、さらに多くの県人の心を動かしたのでしよう。資金調達の目処が立たない状況で、国庫交付金の三倍以上の事業を決断されてますが、まさに勇断。明治の人々は気概が違いますね。

それにしてもTVやインターネットネットがない時代に、神社の再建事業が

県民運動のようにもりあがったことは凄いことです。そのお蔭でこうして全国でも類を見ない立派な社殿が完成しました。ほんとうに有難いこ

災禍を免れた。

一夜にして窮地に追いやられた彌彦神社。だが、その復旧対策はすばやく、急速仮本殿や受付所が設えられ、続々と訪れる見舞客や参拝人を迎えた。そして当座の復旧手当が終わるや再建の準備が始ま

り、半年後に再建の基本構想が打

まれることになった。しかし、その予算

は元に東京帝國大学の伊東忠太工

学博士が設計を担当し、工事は新潟県に委託された。資金は当時、神

社は国幣中社として国家の管理下にあったため国庫交付金が支払われるうことになった。しかし、その予算

計が詳細になるにつれ見積金額が増

えていく。それでも志は曲げられない。ついに工事着工の決断時期が差し迫り、最終的に寄付金が予定通り集

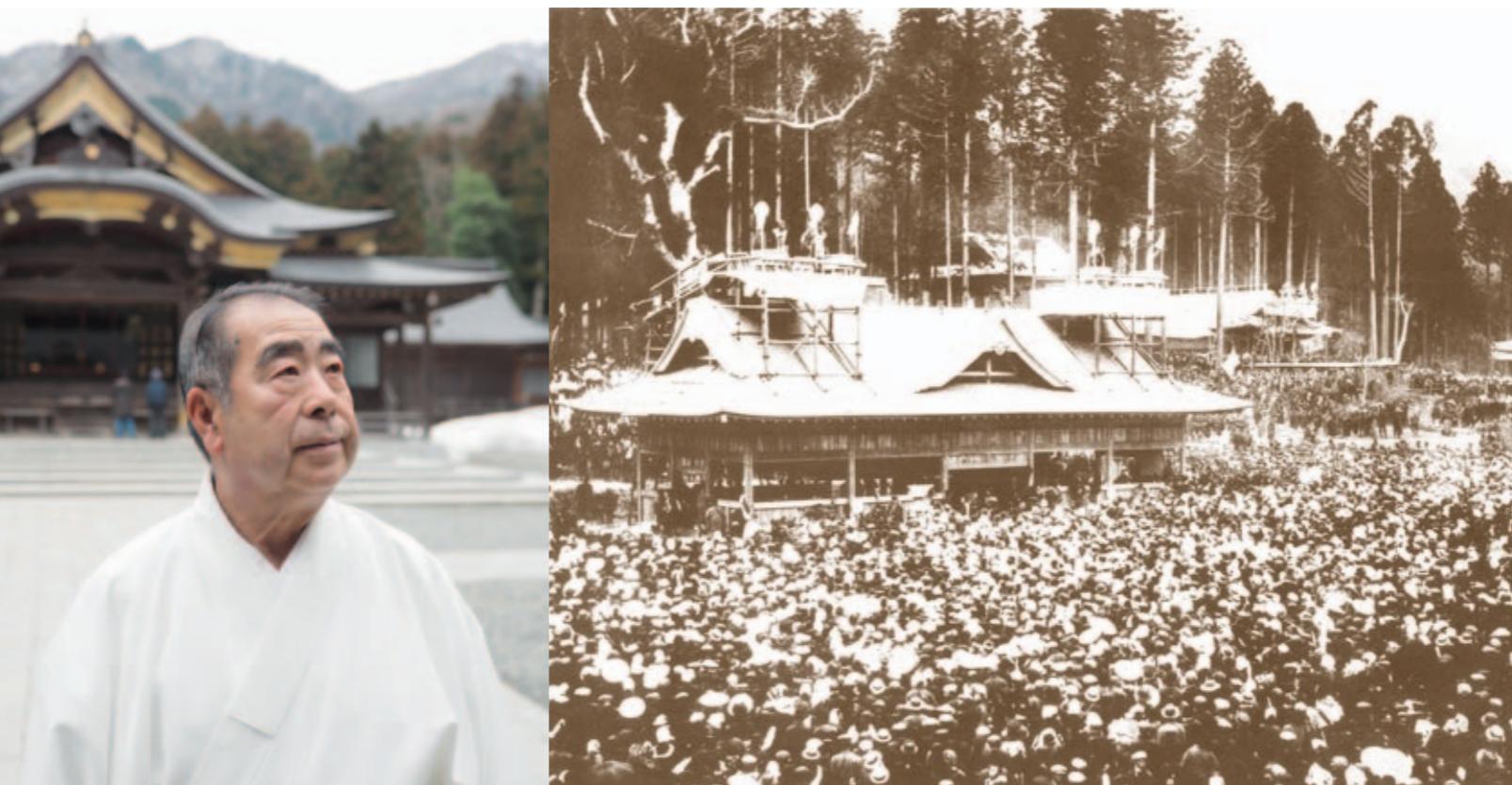
まりならなければ、借入による長期償還を覚悟したという。ところが結果的

に目標額を大幅に超える寄付金が寄せられ、さらに地盤固めの土木工事

や木材の運搬などに予想以上の労力

奉仕もあり、現在の壮麗な社殿が大

正五年（一九一六）に完成。炎上からわずか五年後の事である。なんと寄付金の総額は当時のお金で十七万円弱。海外移住した県人からも寄せられた。計画当初、県民の経済力から目標額を五万円と県は試算したが、



大正5年(1916)10月21日。御遷座の祝いに県下から集まってきた県民に矢羽根に飾られた絵馬殿の屋根がまかれている。



寒い日にもかかわらず、開花したひとひらの桜を嬉しそうに教えてくれた
權宮司の金子清郎さん。

迎えている彌彦神社では、御遷座百

年正の再建から、ちょうど百年を

迎

へ

る

感動させられることと同じように、

索

の日々が始まった。

勇断に共感

高松宮司は「従来通りの大きさのもの」をつくりたい一心で、県内はもとより県の出身者が多い東京や北海道などに寄付のお願いに奔走。でも簡単に多額な募金の目処がつくわけではない。一方で再建計画は進み、設計が詳細になるにつれ見積金額が増えていく。それでも志は曲げられない。ついに工事着工の決断時期が差し迫り、最終的に寄付金が予定通り集まりならなければ、借入による長期償還を覚悟したという。ところが結果的に目標額を大幅に超える寄付金が寄せられ、さらに地盤固めの土木工事や木材の運搬などに予想以上の労力奉仕もあり、現在の壮麗な社殿が大正五年（一九一六）に完成。炎上からわずか五年後の事である。なんと寄付金の総額は当時のお金で十七万円弱。海外移住した県人からも寄せられた。計画当初、県民の経済力から目標額を五万円と県は試算したが、

では構想実現に遠く及ばず、不足分を一般からの寄付金で賄うことになります。とはいっても彌彦神社は、それまで募金活動の経験がなく、その方法も予定額もわからないまま暗中模索の日々が始まった。

高松宮司は「従来通りの大きさのもの」をつくりたい一心で、県内はもとより県の出身者が多い東京や北海道などに寄付のお願いに奔走。でも簡単に多額な募金の目処がつくわけではない。一方で再建計画は進み、設計が詳細になるにつれ見積金額が

永遠の時の途上で

伝える よろこびの遺伝子

海を渡った慰問はがき

彌彦神社と県民の関係性を物語る、ひとつのエピソードがある。

明治三十七年（一九〇四）、日露戦争が本格的になる頃、夜中にお守りを受ける人々が相次いだ。その人々は異口同音に「新発田連隊への招集令が出るらしいから、まず越後一宮の弥彦さんにお詣りにきた」という。

その後も同じような状況が続き、ついに戦争の火ぶたが切られると、今度は県内中から出征軍人の家族たちが、昼も夜もなく、戦地にいる家族の無事を祈りに来た。その真剣な姿に責任の重さを感じた、当時の高松宮司は、その人たちの支えになりたいと神社の絵はがきの発行を思いつく。社殿、舞殿、境内などの絵柄に余白を作り、そこに家族の近況を添え、慰問のはがきを戦地に送り続けた。懐かしい神社の写真に加え家族の様子を知ることができることから戦地で評判になり、戦地や留守を守る家族からも続々と礼状が舞い込んだ。そして、この話を伝え聞いた各地の町

村長たちが出征名簿を抱えてきて、「彼らにもれなく慰問のはがきをお願いしたい」と依頼され、社務所はますます多忙を極めたという。故郷から遠く離れた戦地で緊張の日々を過ごす出征兵士たちに届いた、神社からの慰問はがき。一葉の心の籠った便りに、どれほど慰められたことか。

こうして時代の変化の中で柔軟に対応した神職たちの努力で、県民一人ひとりと関係性を深めていく一方で、古来からの神事が神職によって時代から時代へ受け継がれてきた。

時と時をつなげる仕事

「（神事は）それぞれ意味があつて現代まで伝えられたものであり、それに個人的な解釈を加えることなく守り、伝えてゆくことが仕事」という高橋さん。その言葉を聞いた当初、伝統の重さと冒しがたい領域の存在を感じた。でも伝統を守ることは、永遠に続く未来があることを前提とする、前向きな意志の表れである。

歴代の神職たちに守られてきた、「粥占炭置神事」は、その年の豊作物・漁労の豊凶と天候を占う神事。神事の前夜に一斗の白米で炊いた粥の、時間の経過とともに変化する状態で稻・果物・大豆・川や海の魚の豊凶を、赤々とおこした炭から月毎の天候の神占を行う。「大御膳」同様、心身を浄めた神職により厳重に行われる。数百年から続く神事で、よく当たることから農家の人は

もうひとつ、神社の歴史を鮮明に伝える「大々神楽」がある。毎年、妃神の熟穂屋姫命の命日にあたる四月十八日の妻戸大神例祭に行われる神事の後に、奉納される古式ゆかしい神楽。きらびやかな装束と、不思議な手振り。「はあ／いい／はあ／いい／」という独特の節回しの拍子とともに、一気に奈良平安の日本に引き戻される。都から伝來した舞楽が長い間に地方化したものといわれ、人差し指と中指を立てて剣を表す剣印と、つま先を上げる所作などが、その様式を残している。「大々神楽」は稚兒舞と神職による舞の十三曲があり、全曲を堪能できるのは、この例祭の日だけ。午前十時から、



3月18日の奉奏始めで、ゆるやかな神楽笛や太鼓の調べにのって奉された大々神楽の一曲「地久楽」。この日を皮切りに6月までと9~10月の間、毎週土曜日の午後2時に稚兒舞が1~2曲奉納される。



1月15日の夕刻から翌朝にかけて行われた粥占炭置神事の神占の結果を知らせる占定書



つけられた回数の多さを物語る面と彌彦神社特有の神楽笛

「読者の声 ~前号を読んで~

旨さの密度が違う佐渡
ブリカツ丼は今まで敬遠した部分がありました。今号の記事を読み、一度挑戦してみようという気持ちになりました。記事にもあったように佐渡は旨さの密度が違う。本当にあらゆるもののがおいしい。もっと食の豊かさを前面に出して、誇ってもいいのでですが島の人にとって、わりとあたり前のことなのか、あまりえらぶらない。佐渡島は西と東の文化が融合した、とても稀な場所だと思います。

(長岡市・30代女性)

楽しみな「昔からの定期市」

初夏に佐渡に行く予定があり、ふうどの記事を読み、何が食べられるか、今から楽しみです。また「昔からの定期市」を毎号楽しみにしておりまます。規模が小さくなつても頑張っている「六斎市」も取材してくださればと期待しております。

(秋田市・男性)

それが流儀。それを素直に受け入れてこそ時空の旅を楽しめる。三月十八日の奉奏始めの日、地固めとしての意味をもつ「地久楽」が奉納された。この日、高橋さんが舞殿の中に招き入れてくれた。二十畳ほどの屋内から御簾を透かして、神さまの方に向く舞台が見える。神さまも今年初の神楽笛と太鼓の音に、心躍らせているのだろうか。

後日、もつと先祖の心を知りたくて夜の境内を訪ねてみた。一の鳥居をくぐると、いろんな水の音が聴こえてきた。御手洗川を下る急流の音、手水舎の青竹の樋から滴る優しい音、参道脇の側溝を湧き水が走る音など、水の命がほとばしっていた。そして、きつかり十時。ドン！ドン！ドン！太鼓の音がほの暗い空間を突きぬけ、虚空に拡散していく。同じ音を先祖は聴いた。そして百年後、千年後の人も聴く。やはり、ここは時代の表層を離れ、心を洗う聖地だった。

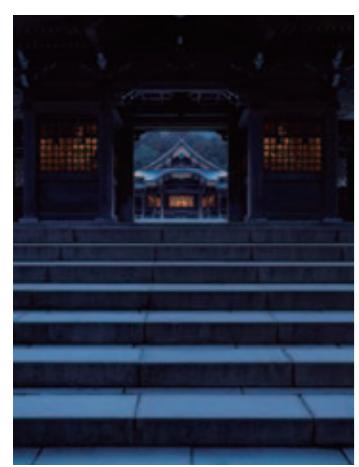
の精神性と地域性を表す特徴的なものが、ふたつある。「大御膳」と「粥占炭置神事」である。「大御膳」は調理した品が含まれる特別な神饌で、毎年恒例の祭典のなかでも、とくに重要な祭典の時だけ神前にお供えする。主な調理品は餅・御蒸・甘酒。調理を担当する神職は、祭典の四日前に調理用の特別な建物である飯殿に忌み籠り、古式の方法で火をおこし、定められている手順や様式などに厳格に従い、心を籠めて調理調製する。元来、神饌はそれがの風土の特徴を反映する調理した熟饌が供えられてきたが、明治期の神道の再編・改革の時、熟饌は人の手を加えることで不浄になるという理由などから禁止され、神饌の品目は水・塩・酒などを含む調理されない生の食品に画一化された。しかし彌彦神社はこの時代の荒波の中でも、伝統を堅持したのである。

「粥占炭置神事」は、その年の豊作なかでも、伝統を堅持したこと提とすると、前向きな意志の表れである。さまざまな神事のなかで、彌彦神社の精神性と地域性を表す特徴的なものが、ふたつある。「大御膳」と「粥占炭置神事」である。「大御膳」は調理した品が含まれる特別な神饌で、毎年恒例の祭典のなかでも、とくに重要な祭典の時だけ神前にお供えする。主な調理品は餅・御蒸・甘酒。調理を担当する神職は、祭典の四日前に調理用の特別な建物である飯殿に忌み籠り、古式の方法で火をおこし、定められている手順や様式などに厳格に従い、心を籠めて調理調製する。元来、神饌はそれがの風土の特徴を反映する調理した熟饌が供えられてきたが、明治期の神道の再編・改革の時、熟饌は人の手を加えることで不浄になるという理由などから禁止され、神饌の品目は水・塩・酒などを含む調理されない生の食品に画一化された。しかし彌彦神社はこの時代の荒波の中でも、伝統を堅持したのである。

「粥占炭置神事」は、その年の豊作なかでも、伝統を堅持したこと提とすると、前向きな意志の表れである。さまざまな神事のなかで、彌彦神社の精神性と地域性を表す特徴的なものが、ふたつある。「大御膳」と「粥占炭置神事」である。「大御膳」は調理した品が含まれる特別な神饌で、毎年恒例の祭典のなかでも、とくに重要な祭典の時だけ神前にお供えする。主な調理品は餅・御蒸・甘酒。調理を担当する神職は、祭典の四日前に調理用の特別な建物である飯殿に忌み籠り、古式の方法で火をおこし、定められている手順や様式などに厳格に従い、心を籠めて調理調製する。元来、神饌はそれがの風土の特徴を反映する調理した熟饌が供えられてきたが、明治期の神道の再編・改革の時、熟饌は人の手を加えることで不浄になるという理由などから禁止され、神饌の品目は水・塩・酒などを含む調理されない生の食品に画一化された。しかし彌彦神社はこの時代の荒波の中でも、伝統を堅持したのである。

古代に戻れる大々神楽

もうひとつ、神社の歴史を鮮明に伝える「大々神楽」がある。毎年、妃神の熟穂屋姫命の命日にあたる四月十八日の妻戸大神例祭に行われる神事の後に、奉納される古式ゆかしい神楽。きらびやかな装束と、不思議な手振り。「はあ／いい／はあ／いい／」という独特の節回しの拍子とともに、一気に奈良平安の日本に引き戻される。都から伝來した舞楽が長い間に地方化したものといわれ、人差し指と中指を立てて剣を表す剣印と、つま先を上げる所作などが、その様式を残している。「大々神楽」は稚兒舞と神職による舞の十三曲があり、全曲を堪能できるのは、この例祭の日だけ。午前十時から、



インフォメーション

越後一宮 彌彦神社

西蒲原郡弥彦村弥彦
TEL 0256-94-2001